



----- 主な内容 -----

|                               |        |
|-------------------------------|--------|
| 戦争に翻弄された青春.....雪山伸一.....      | (1~10) |
| なぜ「獨協」だったのか.....              | (2)    |
| 空腹と寒さの下宿生活.....               | (3)    |
| 息子と病院を...父の夢 散る.....          | (5)    |
| そして終戦後...険しい道.....            | (9)    |
| 植民地時代台湾の教育事情と獨協.....新宮譲治..... | (6)    |
| 事務局だより.....                   | (11)   |
| 私の近況.....                     | (12)   |
| クラス会だより.....                  | (14)   |

第 63 号

平成16年12月10日発行

発行所 〒112-0014 東京都文京区関口3-8-1

TEL/FAX 03(3946)6352 (直通)

獨協同窓会 発行責任者 宮田和夫

## 戦争に翻弄された青春



軍事教練で行軍した日光・中禅寺湖畔で（立っている列の右から4人目が陳以文さん）= 6ページ参照

### 台湾の同窓生を訪ねて 詳報

第2次大戦敗戦前の旧制獨協中学には、故郷の台湾を離れて上京し、医学生をめざして勉強する大勢の生徒たちがいた。すでに大半が消息もわからなくなっているなかで、連絡のついた同窓生5人を、今春、新宮譲治先生とともに台湾を訪ねたいきさつは前号で紹介した。

私たちが会ったのは、高雄で劉祐上さん（昭18年卒）、林文仁さん（昭19年卒）、許清泉さん（昭21年卒）の3人と、宜蘭で陳以文さん（昭20年<5>卒）と陳成章さん（昭20年<4>卒）のご兄弟。本号では、5人の同窓生との10時間以上におよぶインタビューから、戦時下の獨協を振り返った。

空襲、勤労働員、食糧不足……戦争の影響は市民すべてにひとしくおよぶ。とはいえ、たった1人ではるばる上京して下宿生活を送る台湾出身の

にとって、あらたな苦難の始まりでもあった。  
**(昭35卒、常任幹事・雪山 伸一)**

## 「医者になれる学校」の評判は台湾にまで

昭和15年3月、父親にともなわれて上京した陳以文さんが覚えているのは、船内の食堂で食べたカレーライスがおいしかったこと。はじめての味だった。郷里を離れる寂しさや、東京で待っている未知の生活への不安より、むしろ船旅への好奇心の方が大きかった。小学校を卒業したばかりの、まだ12歳である。しかし、昭和16年12月に太平洋戦争が始まって半年もすると、台湾と内地（日本本土）を結ぶこの船旅は安全とはいえなくなる。アメリカの潜水艦が東シナ海まで進出しはじめたのだ。17年に入学した許さんがはじめての夏休みを郷里で過ごした帰り、船が潜水艦にねらわれた。

17年以降、夏休みに台湾に帰った人は、5人のうちだれもない。電話もない。故郷の両親とのあいだを結ぶのは数週間かかる郵便だけ。それも、戦争が激しくなると、届かないことも多かった。



「私が住む台南には台南一中と二中があった。あとはキリスト教系の私学だけ。このうち一中は日本人専用

もっと大変だった。中学と高等女学校の半分は、人口比ではわずか5%強しかいない日本人の子弟で占領されていたのだ。

「私が住む台南には台南一中と二中があった。あとはキリスト教系の私学だけ。このうち一中は日本人専用なのです。台湾人は、よっぽど優秀な子か、ようするに金持ちでコネのある家の子しか入れなかった。だから台湾人はみな二中をめざす。激しい競争だった」と許さんは話す。

#### ◇ゆとりある家庭環境

医院を開業していた陳さん兄弟の父親は、宜蘭に中学がなかったこともあって、はじめから息子たちを内地の中学に進学させることに決めていた。劉さんに日本での進学を勧めたのは公学校の日本人の先生だった。そのほうが才能を伸ばせると考えたからだ。一方、林さんと許さんは地元の中学受験に失敗して内地への進学を決めた。

林さんの家では、上の姉が東京の女子医専を出ており、次の姉も東京で勉強中だった。林さんは中学受験に失敗すると、翌年姉を追って東京に出て予備校に通い、秋に獨協に編入した。

許さんの父は林さんの父と仕事仲間。やはり許さんを東京の予備校に通わせ、獨協に入れた。

金はかかったが、そのほうが確実だった。まし

て、子どもを医者にするには、私立の医大がたくさんある東京の方が有利だった。

劉さんの家は地主、林さんと許さんの家は手広く商店を経営していた。許さんの家は質屋も兼ねていた。いずれの家も息子を東京に送り出すゆとりは、十分にあった。

「毎月40円仕送りしてもらっていた。郵便局に為替を持っていくと、郵便局のお嬢さんが笑うんだよ、『台湾の兄ちゃんはお金持ちだね』って」と劉さん思い出す。大卒の銀行員の初任給が70円だったころだ。「ぼくのところは45円だったかな」と許さん。中学生にして、郵便局の女性事務員よりは確実に収入は上だった。

東京の生活は楽しかった。「東京では台湾人差別がなかった。交番の巡査、あれ、怖くないでしょう？ 台湾では違った。巡査は威張っていた」と話すのは許さん。「東京に行ったときは希望に満ちていました。『やるぞ!』という気持ちだった。だから猛烈に勉強した。1年、2年のころは学年でも1、2番を争う成績で、級長をやらされた。号令をかけると言葉になまりがあって、はじめは級友に笑われたけれど、学校でも差別はなかった」しかし、希望に満ちた5人の学校生活は戦火の拡大とともに狂いはじめる。

## ② ひとりぼっちの下宿生活

### 空腹と寒さに耐え、戦火の東京を生き抜く

「獨協にはいい思い出なんかありゃしない。あのころの獨協は勉強するところではなかった。3年の夏から十条の兵器工場へ行って働かされた。暮れになると空襲が始まった。空襲の後かたづけにもかりだされ、勉強どころではなかった」

許さんははじめ、わたしたちに会うつもりはなかった。それでもわざわざ隣の台南県から来てくれたのは、戦中・戦後の命の恩人ともいべき2人の友人のことを話しておきたかったからだ、といった。「感謝の気持ちは伝えてあるのだけれど、なんとなく、それだけではまだ足りない気がする。この機会に、学校の歴史に残して、2人に感謝を表したいと思って来ることにしたのです」

許さんが入学した昭和17年4月にアメリカの爆



許 清泉さん（昭21卒）

撃機による最初の東京空襲があり、開戦以来の戦勝気分冷や水が浴びせかけられた。翌18年秋には強制疎開の家屋の取り壊しに動員された。そして3年生になった19年夏からは勤労動員で軍需工場に派遣されるようになった。11月からは大型爆撃機B29による空襲が始まった。

以下は許さんの語る戦時下の思い出である。

「勤労動員といっても、家族と一緒に人はまだ

いいのです。工場から帰ってけっこう勉強する時間があります。しかし、わたしは違うのです。食事洗濯も、全部自分でしなければならない」

親元を遠く離れ、もの不足の戦時下の東京に放り出された少年の苦闘が始まる。

「下宿では、はじめは食事を出してくれたけれど、戦争がひどくなるとダメになった。配給券をもらって、それで食事をするのです。配給券は1日3枚で、1枚でどんぶりのごはんが8分目ぐらい、おかずも2、3種類しか取れない。お金を持っても買えないのです。朝いつも2食分食べてしまっ、弁当を持っていく分がない。空腹を我慢して、帰ってきてから残り1枚を使う。おなかが減って、勉強どころではないのです。家で教科書を開いても、頭に字が入らない。方程式が頭に入らない」

「柔道部に入っていました。講道館の対抗試合にでたとき、おなかすいて、相手を倒したのに押さえ込む力が出ないのです。すぐひっくり返されて負けてしまった」

#### ◇炭俵盗んだ屈辱の記憶

当時、許さんは3年上の林さんと一緒に麴町の下宿に住んでいた。林さんはもうすっかり忘れているが、そのころ、2人は隣組で配給する炭を1俵盗んだことがある。多分18年から19年にかけての冬だった。

「冬は寒くてね。学校から帰ると制服を着たままで敷きっぱなしの布団に潜り込む。下宿だから火の気もないのです。炭も配給なのです。でも、僕ら下宿しているものところには来やしない」

いまでも忘れられない。寒い日だった。2階の窓から、近くの空き地に積まれた炭俵の山が見えた。隣組が配給する炭である。

「深夜、2人で綱をつくって窓から下りて、1俵盗んで押し入れに隠したのです」

炭俵を隠して、窓の下をのぞいてはハッとした。俵からこぼれた炭の粉が空き地から窓の下まで黒い線を描いているではないか。あわててもう一度下りて線を消した。それからは、寒さに我慢できないとき、そっと炭をおこして手をあぶった。

盗みまでしなければならなかったことは、屈辱の思い出だ。話している許さんの表情がゆがんだ。

林さんが台湾に帰ってしばらくすると、アメリカ

軍による空襲が本格化した。はじめは空襲警報が発令されるたびに防空壕に避難していた許さんも、そのうちに避難するのがおっくうになって、「もうどうでもいいや」と布団にくるまったまま寝ているようになった。

#### ◇見かねた級友が救いの手

そのころ、許さんは同級生の堤圭一さんに「うちに遊びに来ないか。そして勉強しないか」と誘われた。堤さんの家に行き、堤さんの母親に聞かれるままに毎日の暮らしぶりを話した。すると数日後、堤さんが「浦和に持っている家が空き家になっているので、留守番代わりに行かないか」といってくれた。昭和19年末だった。

「堤君がリヤカーを借りてきてくれました。ぼくは自転車は乗れたけれど、リヤカーのついた自転車ははじめてだった。堤君が自転車に乗って、ぼくがうしろからリヤカーを押して、麴町から浦和まで一緒に荷物を運んだ。いま考えたら、よく行けたなと思う。しばらくしたら麴町が空襲で焼けてしまった。そのまま麴町にいたら、ぼくはおそらく犠牲になっていた。そう考えると、運命というものはある、と思うのです」

そして昭和20年8月15日の終戦。許さんたちにとって、あらたな苦難のはじまりだった。日本が無条件降伏をしてすべての植民地を放棄したことにより、台湾は日本の一部ではなくなった。それは、郷里からの為替送金が不可能になったということでもあった。どうやって生きていけばいいのか。ようやく勉強ができる時代になったというのに、こころざし半ばで中途退学して台湾に帰らなければならないのか。

学費を滞納し、あわや除籍というとき、「うちに来ないか」と救いの手をさしのべてくれたのが、やはり同級生の沼城通夫さんだった。同じ台湾出身の級友と2人を、田無の家に住まわせてくれた。

「沼城君のお父さんには滞納していた学費まで払ってもらったのです。食べさせてもらって、学費まで出してもらって。……でなかったら、終戦後、学校なんか行かれやしなかった。いまも本当に感謝しています」

「堤君と沼城君、あの2人がいなかったら、多分いまのぼくはない」

旧制中学は5年制だったが、昭和20年に学徒動

員体制のもとで4年生を繰り上げ卒業させたのにつづいて、翌21年にも希望者には4年での卒業を認めた。許さんも卒業を希望した。

「沼城君のお父さんに学費を出してもらって学校を続けることは、あれ以上はできなかったし、それに一時はなんとか頑張ろうと、上の学校を受ける準備もしたのだけれど、どうにも教科書が頭に入らない。3年の後半から全然勉強していないのですからね。空白があまりに長かった」

といって、台湾に帰国することも考えなくなかった。中学入学が遅れた許さんは卒業したとき20歳。なにも成果をあげないまま、みすみす帰国するのでは、両親に顔向けできない気がした。両親には音信を絶って、職を探した。

だが、失業者があふれた戦後の混乱期、台湾の中国復帰によりにわかに「戦勝国民」となったとはいえ、中学を出たばかりの許さんにまともな職

はない。2、3年間の苦闘ののち、ついに両親に手紙を書いた。両親からはすぐに手紙と大きな小包が届けられた。

父危篤の連絡で、許さんが台湾に帰ったのは昭和26年のことだった。

＊

堤さんと沼城さんに当時の様子を聞いた。

「許さんの下宿に行ったことがあって、大変だな、と思っていました。浦和の家が空き家になっていて不用心だったから来てもらった。多少は食べ物の蓄えもあったし。それだけのことですよ」とさりげなく話した。

沼城さんは「子どもが5人いて、わが家の暮らしが楽なわけではなかった。が、父は新聞記者で中国の特派員だったこともある。日本が中国でしたことも知っていたから、何とかしたいと思ったのでしょ」と、これも懐かしげだった。

### ③ 息子と病院を…父の夢 散る

## 獨協へ兄弟4人。長男病没、四男はシベリア抑留

陳さん兄弟の父親、陳土金さんは努力の人だった。公学校の高等科を出て、宜蘭病院に勤めた。仕事ぶりは誠実で、院長の森さんの信頼も厚かった。多分、医学への知識欲も旺盛だったのだろう。院長は土金さんを総督府医学校に推薦した。明治32年に総督府民生部長として着任した後藤新平の発案でつくられた台湾初の医師養成機関だ。

土金さんは本科・予科5年間の課程を終えて卒業すると内科医として森院長のもとで働き、しばらくして宜蘭に蓬萊医院を開業した。しかし、医師になったものの、土金さんには不満が残った。医学校は、遅れた台湾の衛生状態の改善を急ぐた



陳 以文さん (昭20年 5卒)



陳 成章さん (昭20年 4卒)

め、理論より現場を優先する医師養成方法をとっていた。だから、当時の医学では必須だったドイツ語も教えられなかった。「ドイツ語をやらなきゃ本当の医者にはなれない」と、診療のかたわら、

土金さんは独学でドイツ語を勉強した。

### ◇ドイツ語へのこだわり

土金さんには5人の男の子がいた。体の弱かった三男を除く4人を医師にさせようと思い、そのためにわざわざ獨協に入学させたのも、「ドイツ語に堪能な医者」へのこだわりがあったのかもしれない。陳以文さんが最初の夏休みに帰郷して、父の診察室に行くと、「ドイツ語を話して見ろ」と言われた。「ダンケ・シェーン」「デル・ファーテル」「ディ・ムッテル」とドイツ語で言うと、父が満足げだったのを覚えている。子ども4人を医者にして、医院を病院に拡大する。直接聞かされたことはないが、それが父の願いだったのはわかっていて、と口をそろえる。

以文さんが獨協に入学したとき、長兄の孝一さんと次兄の洋二さんがともに5年生に在学してい



りに成章さんが入学した。いくら医者が高収入とはいえ、4人も内地の私学に進学させることができたのは、宜蘭病院の森院長が台湾を引き揚げて横浜の反町で開業しており、4人の世話を引き受けてくれたからでもあった。

以文さんによると、「森のおばさん」はしつけがきびしかった。「横浜に着いた夜、食卓の真ん中に大きなすし桶が置かれていた。さあ食べようとしたらおばさんに『お待ちなさい。そんな箸の持ち方がありませんか』としかられた。これはえらいところに来たと思った」

しかし、森家に寄宿したおかげで、陳兄弟は食事や配給の問題など、ほかの台湾出身者の苦労は味わわずにすんだ。なにより、家庭的な雰囲気の中ですごすことができた。

以文さんはだれにも好かれるひょうきんな子どもだった。いまでもその面影は残っている。そのかわり、成績はいまひとつだった。教頭に呼ばれ、「兄さんはいい成績なのに、お前は どうして」としかられ、成章さんが入学すると、「弟はできるのに、お前は」としかられた。しかし、成章さんにとっては上級生のいじめから守ってくれるやさしい兄だった。

以文さんは昭和15年、成章さんは16年の入学。だが、のんびりした学校生活はすぐに終わった。

以文さんたちの学年は軍事教練で日光まで行ったことがある。深夜、浅草駅まで徒歩で行き、日光駅からいろは坂を越えて奥日光まで往復の行軍

である。帰途、池袋駅から学校まで行軍していると、千歳橋まで来たところで靴代わりにはいていた地下足袋の片方が破れてしまった。めんどうだから両方とも脱ぎ捨てて、裸足で学校まで帰り着いた。それを見つけた教頭は、「これこそ米英撃滅の精神だ」とほめてくれた。そんな時代だった。

成章さんは教練の時間、「お前たちにも1人や2人ぐらいロスケ（ロシア人の蔑称）を殺す実力はある」と言って銃剣術を教えられた。学校が人殺しを教えた時代である。

#### ◇医師あきらめ軍隊志願

戦況は日増しに悪化した。昭和18年、以文さんが4年になったころにはもうほとんど授業はなくなっていた。勤労働員の毎日である。そのころ、陸軍に特別幹部候補生という制度が設けられた。兵員不足を補うため、年齢制限を15歳まで下げ、普通なら入隊から2年かかる上等兵への昇級を、半年の訓練期間が終わると上等兵、その後も半年ごとに1階級ずつあがる仕組みにして志願者をつくる新制度だった。昭和19年、半年後に卒業を控えた5年生の秋、以文さんはこれに応募した。17歳になったばかりだった。選んだ兵科は飛行科。

「もうしょうがない。もうあきらめてね。お父さんには申し訳ないけれど、どうせ勉強できないのなら、軍隊に入って早く昇進して、少尉か中尉になって台湾に帰ろうと思った」

入隊志願の手続きには戸籍謄本が必要だった。

→ 8 ページ先頭につづく

### 解説

## 植民地時代台湾の教育事情と獨協

新宮 譲治

#### ◎国語教育のはじまりと変化

台湾は日清戦争で勝利した日本が、初めて領有した植民地である。台湾総督府は、日本人と台湾人相互の意志疎通をはかるため、台湾人の日本語学習を統治政策の重要課題と位置づけていた。

総督府直轄の教育施設は、国語学校（主として教員養成）と国語伝習所であったが、やがて国語教育の中心は、明治31年に設立された台湾人児童の初等普通教育機関・公学校に移った。

日常的な日本語普及を重視し、飽きるほど同じことをくり返す話し方練習、朝の起床から夜の就

寝まで台湾語を一言も使わなという方法も、公学校国語教育で工夫され、台湾人児童の日本人化がはかられた。

#### ◎台湾教育令以後

大正8年の台湾教育令では、「台湾人ノ教育」は教育勅語にもとづく「忠良ナル国民ヲ育成」するため、内地人と分けて台湾人教育を施すとし、国語教育をその中心に据えた。これ以後の同化政策は、初期のそれとは様相を異にする。

つづく新教育令（大正11年）では、「一視同仁」（天皇の臣民として平等にあつかう）を趣旨とし、内

地人、台湾人の区別なく教育の一本化を掲げたが、小学校(内地人と国語常用の台湾人用)と公学校(台湾人用)との別学は、「本島民衆ガ国語ヲ常用セザルニ因ル」一時的便法として継続した。

劉祐上さん(昭和18年卒)は公学校出身で、「子供の時代、家では客家(ハッカ)語(台湾人母語の一つ・福建省辺りの方言)を使いました」と言う。70歳代同窓の、その親世代は日本語に馴染めず、国語常用家庭の台湾人児童は多くはない。

宜蘭の陳以文さん・成章さん兄弟(ともに昭和20年卒)は小学校卒だが、これは少数派と言ってよい。台湾人児童が小学校で学ぶ比率は、日本統治時代を通し1割に達することはなかった(表1参照)。

| 表1 台湾の小学校における児童数の比較 |        |        | 表2 台湾の人口と中学校在学者数 |                  |
|---------------------|--------|--------|------------------|------------------|
| 単位:人                | 児童総数   | 台湾人児童数 | 内地人(中学校在学者数)     | 台湾人(中学校在学者数)     |
| 1920(大正9)年          | 19,792 | 54     | 166,621(1,157)   | 3,566,381(……)    |
| 1930(昭和5)年          | 34,163 | 1,652  | 232,299(2,917)   | 4,400,076(1,910) |
| 1940(昭和15)年         | 49,609 | 3,836  | 346,663(5,186)   | 5,682,233(5,832) |

表1 鍾清漢『日本植民地下の台湾教育』(多賀出版)より作成。表2 アジア経済研究所『韓国と台湾の教育開発』より作成。

◎医師の仕事

官僚や企業の管理的地位は内地人が独占し、政治・法律の学問は植民地人には無用で、仮に台湾外の地で学んだとしても就職の道はなく、「高等遊民」と称され無為徒食の道を歩くだけである。

医学は別で、保健衛生の必要上政府は早くから台湾総督府医学校で台湾人を教育し、医師の確保に努めていた。台湾研究で著名な矢内原忠雄は、この事実を「国語教育と医学、これ台湾統治の実用上許容せられたる教育の全部」と表現した。

陳さん兄弟の父親土金さんは、勤めていた宜蘭病院長の推薦で医学校に入り、予科1年本科4年を終えて医師となった。病院勤務を経て宜蘭で蓬萊医院を開業、地域の人々から信望を集め、その上4人の子弟を獨協で勉強させる経済的力も持つに至る(本文③参照)。

その後、医学校は公学校6年終了程度を入学資格とする医学専門学校と改称され、予科の修業年限を4年とし、台湾人の医師を養成した。

昭和3年に創設された台北帝国大学は内地人学生が多いが、医学部だけは昭和10年代、ほぼ半数

◎中学校進学の違い

大正期末から昭和初頭、台湾の資本主義、商品流通の発展、中産階級の成長、子弟進学要求の高まりが連動し、台湾人向け中学校も各地に設置された。昭和10年代、中学校進学者は内地人とほぼ同数に達したが、人口比では学校不足で競争率が高い上(表2参照)、台湾人向け中学校の上級学校進学者は少ない。

一方、上級学校進学者が多い内地人向け中学校の競争率は低く、内地人はたやすく入学できたが、台湾人はほとんど閉め出されていた。その中学校へ入るのは「大金持ちか、コネのある家の子か、特別優秀な子」(本文○参照)と、許清泉さん(昭和21年卒)が、出身地の台南一中(内地人向け中学校)を例に説明した。差別の実態である。

を台湾人学生が占め、また、医学専門学校へも入学できた。しかし、ほぼ570万(昭和15年・表2参照)の台湾人には過小で、この時期、経済力を蓄えた人々が尊敬され安定した医師への夢を子弟に託そうとしても、台湾にいる限り極めて狭き門である。

◎獨協へ入学

「私の家はお百姓」と言う劉祐上さんは、高雄市近郊美濃で地主の家に育ち、「医者になるなら獨協」という評判で、「親や親戚・学校の先生のすすめ」に従った。

高雄の林文仁さん(昭和19年卒)、隣県台南の許清泉さんの父親は共に盛大に商売を営む仕事仲間(本文①参照)で、息子の進学を相談し合ったらしい。宜蘭の陳兄弟は言うまでもなく、皆それぞれに医師を目指しての獨協入学であった。

学校も生徒も「差別はしなかった」と異口同音に語られた。入試も難関ではなかったようで、インタビューでも田村教頭の面接ばかりが話題であった。何よりも、私学を含む医学関係上級学校への途が開かれている獨協は、経済的に恵まれた層に魅力的な学校であった。(本校元教諭)

台湾の父に手紙を書いた。父は黙って送ってくれた。成章さんは「やめて、とは言えなかった。このさきどうなるのかわからなかったし、兄が自分で判断したのならそれでいいと思った」という。

派遣されたのは八戸航空隊。しかし、もはや練習機も不足していた。そのうえ以文さんにはぜんそくの気があり、飛行兵ではなく整備兵にまわされた。半年後、昭和20年4月末に空襲の激しくなった本土を逃れ、訓練の場を求めて満州へ。そしてそのまま、前線に出ることなく終戦を迎え、侵攻したソ連軍の捕虜となった。

以文さんの話を聞いたあとで調べてみると、練習機の不足とぜんそくの気は幸いだったのかもしれない。各地に配属された特別幹部候補生のなかには、わずかな訓練で陸軍の特攻隊員とされ、死んでいった年少の兵士もかなりいる。

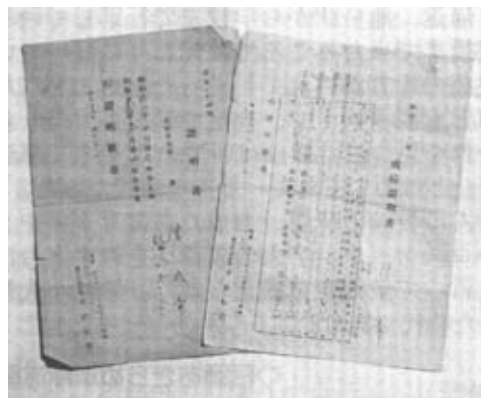
酷寒のシベリアで3年過ごした。バイカル湖畔のイルクーツクからさらに数百キロ入った国営農場が抑留先だった。マイナス40度から50度にもなるシベリアの冬にも負けなかったのは、若さとだれにでも愛される性格のおかげだった。

抑留所で、パラチフスにかかって入院したことがある。1週間ほどたって熱がひいたころ、病院の炊事係の班長が来て「お前、手伝え」といわれた。おかげで配膳した残りのお粥をたっぷり食べることができた。その後、鉄道の建設工事に従事しているころ、「お前、獨協の卒業生か。きつかったら俺に言え、何とかする」と言ってくれた軍医がいた。この部隊で一番先に帰国するグループに入れてくれたのもこの軍医のおかげだった。獨協の先輩だと思うのだが、名前を忘れてしまった。

#### ◇兄の遺骨と無念の帰郷

以文さんが入隊したあと、昭和20年3月に成章さんは4年で繰り上げ卒業となった。孝一さんも九州歯科医専を卒業し、小倉の病院に勤めはじめた。洋二さんは日大歯学部に在学中だった。

成章さんは各地の医大や医専に願書を出したが、どこも書類審査ではねられた。成績は良かったから、先生も不思議がった。「成績とは関係ないでしょう。あの程度の成績なら、普通は通っています。台湾出身だからだ、ということはおわかっていました」。どこも台湾出身者の入学には内々に枠を設けていたのだ。東京に来て、とりたてて差別を感じ



陳成章さんの卒業証明書と成績証明書。台湾に帰ってから上級学校進学のために取り寄せた

たことはなかったが、これが最大の差別だった。

そして終戦。1年浪人をして再度挑戦しようとしているところ、10月に小倉の兄が結核で亡くなった。突然の別れだった。その年の暮れ、洋二さんが言った。「お前、孝一兄さんの遺骨を持って、台湾に帰らないか？」

以文さんはシベリアに抑留され、いつ帰るかわからない。戦後の混乱は激しさを増す。台湾からの送金も途絶え、洋二さんはアルバイトで学資を稼いでいた。成章さんが東京にいて展望が開けるのかどうか、兄にも予想はつかなかった。

年末に船に乗り、宜蘭についたのは旧暦の1月15日の夜。元宵節という小正月の祝いの日だった。この日、張り子の竜が街を練り歩く。成章さんが帰ったとき、みな竜の踊りを見に行っていて、家はからっぽだった。まもなく父の土金さんたちが戻ってきた。祭りの喜びは一転し、涙の夜になった。長男の遺骨を前に、父は泣いた。長男は死に、四男はシベリアに抑留されていた。父の夢は粉々になった。以文さんが台湾に帰ったのはそれから2年半たった昭和23年9月だった。

獨協に学んだ4兄弟のうち、父の考えどおり医者になったのは次男の洋二さんだけだった。横浜で歯科医を開業し、日本に帰化した。以文さんは医院で老いた父の手伝いをした。成章さんは台北高等学校の後身の台北高級中学に入り直して台北帝大から名を変えた台湾大学の医学部をねらうが失敗。5年ほど小学校と中学校の教員を務めたのちに、以文さんと宜蘭で薬局を開いた。

陳土金さんは昭和13年、総督府が進める皇民化運動に沿って、姓を景山に替えた。皇民化運動の本格化は15年ごろだから、早い時期の改姓名であ



る。これまで孝一さん、洋二さんと呼んできたのは、いずれも改姓名後の名前である。以文さんは雅文、成章さんは毅という名前をもらった。土金さん自身は逸人と名乗った。「隠逸」の逸、「逸材」の逸、「逸楽」の逸。そして「獨逸」の逸でもある。「おれは逃げ足が早いから」と子どもたちには説明したが、なぜ逸人なのか本当のところはわからない。

朝鮮の「創氏改名」とは違って、台湾での「改姓名」は強制ではなかった。しかし、ある程度以上の階層の台湾人にとっては、これを拒むことは難しかった。あるいは、森院長に認められて総督府医学校を出て医師になった土金さんは、積極的に日本人になろうとしていたのかもしれない。日本と一体化することが台湾近代化の道でもあったのだ。だから、名前を変えることに抵抗はなかったのかもしれない。陳さん兄弟から話を聞きながら、そう感じた。土金さんは子どもを小学校に入れた。そのため、以文さんと成章さんは通学途中で公学校の生徒から「お前ら、犬だ」とののしられたこともある。

#### ◇「生涯町医者」を貫いた父

日本が敗れ、台湾が中国に復帰したとき、景山逸人から陳土金に戻ったとき、土金さんが何を考えていたかは、わからない。土金さんが繰り返し子どもたちに話していた言葉に「走るときは早けれど、つまずき、こけることあり」というのがある。人生、先を急がず、着実に一步一步進むのが肝心だ。父はそれを座右の銘にして人生を歩んだ。

以文さんが覚えている土金さんの姿がある。

シベリアから帰った以文さんが父親の助手を務めていたころ、ある日熱の下がらない7歳ぐらいの子が親に連れられてきた。どこの医者へいっても直らないのでここに来たのらしかった。

「おやじは打診してみよう」といって、おやじは打診してみようといふことで、はじめて見るような太い注射針を胸膜に刺した。注射器で100CCを採ると血や膿が混じっていた。蒸留水を入れては吸い出して、最後にペニシリンの粉末を溶いて入れ、絆創膏を貼った。翌日には熱が下がった。おやじはたいしたものだった。

「晩年に父が倒れたとき、『あの子がどうなっているか、会ってみたい』と言いだした。捜し出したら、父のことは覚えていて、すぐ来てくれた。『先生!』『よかった。あんた元気だね、何している?』『豚の子を売っています』というような会話だった。そのときは意識がはっきりしていたが、しばらくたってだめになった」

土金さんの往診の足は自転車だった。ほかの医者が人力車や、のちになってはハイヤーを使うようになって、土金さんはペダルを踏みつづけた。夜中の往診も断ることはなかった。

歴史に翻弄されながらも、父は宜蘭の町医者としての人生をまっとうしたのだ、と以文さんはいま思う。

以文さんは言う。「歴史の荒波にもまれたのが私の人生だった。しかし、私は、父の言葉を思い出しながら、そのときそのときに一番良い判断をしてきたと思っている。だから、人生に悔いはない」

#### ④ そして終戦後…険しい道

### 中国復帰の混乱の中、医師の夢も空しく

戦後、台湾が日本の植民地を脱して中国の一部となったことは、社会に複雑な問題を引き起こした。しかも、総督府に代わって乗り込んできたのが国民党政権の汚職や腐敗にまみれた軍人や官僚たちだったことが、その複雑さを増幅した。内地で学んだ若者たちにとって、「日本人」から「中国人」への意識の転換はなおさら難しかった。

劉祐上さんは昭和18年に獨協を卒業し、1年浪人して慶応医学部に合格した。が、あと半年余で

念願の医学部への進学がかなう予科2年の夏に終戦を迎えた。混乱の極みにある日本、中国への復帰にわく台湾。一人っ子だった劉さんはとりあえず台湾に帰ることにした。

「やっと本当の中国人になったといううれしさと、せっかく日本の教育を受けたのにという残念さと……。植民地時代、差別があまりにひどかったから国民党軍を歓迎したのに、来てみればあにはからんやという感じ。日本へ帰って勉強を続けたか



卒業アルバム  
の劉祐上さん  
（右端）。  
この写真が  
獨協で学んだ  
証明とな  
った（同級生  
の田中健吾  
さん提供）

ったが、それはできなかった」

劉さんは師範学校に入りなおし、教員への道をめざすことにした。中学の卒業資格があれば受験はできるはずだった。終戦直前に目黒区武蔵小山の下宿が空襲で全焼した劉さんにとって、肌身離さず持ち歩いた獨協の卒業証明書がいま役立つはずだった。ところが、そこで問題が生じた。

#### ◇役に立たぬ卒業証明書

卒業証明書を見た係官は「そんなもののいくらでも偽造できる。君が本当に日本で学んだ証拠にはならない」と信用してくれないのだ。植民地時代を否定する風潮が日増しに強まっていたころである。「写真のついたものを持ってきなさい」

しかし、焼け出された劉さんには写真などあろうはずがない。台湾出身の同級生がたまたま近くにいて、アルバムを持ち帰っていた。そのアルバムを借りてふたたび係官のところへ行き、小さな写真を示して、「これがわたしです」と訴えた。ようやく係官は認めてくれた。

師範学校を出た劉さんは、定年まで郷里で中学校の先生を務めた。いまも日本は懐かしく、テレビではNHKの国際放送ばかり見ている。

林文仁さんは昭和19年に卒業し、いくつか医専や医大を受験した。しかし、いずれもいま一步およばなかった。戦時下、生活はますます苦しくなる。林さんは内地での進学を早々にあきらめて台湾に帰った。そして上の姉のツテで台北帝大付属熱帯医学研究所に仕事口を見つけた。

熱帯医学研究所は国民党政権になっても台湾医学の中心的研究所とみなされ、林さんの暮らしは安泰だった。早く帰国し、植民地時代に生活基

盤をつくっておいたのが幸いした。

許清泉さんはすでに述べたように、昭和26年、父危篤の報で帰国し、父親の雑穀商を引き継いだ。

陳さん兄弟のこともすでに述べた。いま成章さんは、毎週1回、町はずれの公民館で20人ぐらいを相手に日本語を教えている。日本と台湾の関係は複雑である。台湾人差別の激しかった植民地時代、そして日本統治時代をすべて否定した国民党独裁の時代。国民党独裁が終わって、いまようやく日本を対等の国として見ることができるようになった、と感じている。

もっとも許さんは、「戦争中あれだけ協力させておいて、戦後の日本政府は台湾に対して薄情ですよ。いまの日本は中国の方ばかり向いている。商人に成り下がっています」と批判するのだが。

#### ◇忘れがたい獨協時代

陳成章さんは私たちと話している途中、奥さんに電話をかけた。日本語である。「私たちの世代は日本語が一番身近なのです」という。

終戦は台湾の人たちにさまざまに価値観の転換を迫った。そのひとつが言葉。学校に入るまでは台湾語を話し、公学校や小学校で日本語を習った。日本が敗れて台湾が中華民国になると、北京語が標準語となった。日本語になじんだ台湾の人たちは、日本の敗戦とともに、まったくあたらしく北京語を覚えなくてはならなくなったのだ。

台湾で会った5人の卒業生たちは、ときには懐かしげに、ときには激しく獨協時代を語った。医師をめざした5人。だれもその夢を実現できなかった。しかし、自分の青春をゆだね、結果的に人生の岐路となった獨協時代は、5人にとって、いまだ忘れがたい過去として存在し続けているようだった。

陳以文さんがシベリアで会った獨協出身と思われる軍医に心当たりのある方はお知らせください。年格好から見て、昭和10～15年ごろの卒業ではないかとのことです。

この記事ができるまで、多くの方にお世話になりました。劉祐上さんをはじめとする台湾の同窓生のみなさん、陳さん兄弟の兄の景山洋二さん、当時のクラスメートの方々、そして台湾に同行し、解説を書いてくださった新宮譲治先生に感謝いたします。私たちの旅費を補助してくださった獨協同窓会にもお礼を申し上げます。（雪山）

---

## 04年度総会・懇親会報告

6月19日、母校小講堂で2004年度の同窓会総会が開催されました。当日は梅雨の晴れ間で、多数の同窓生が出席しました。

議事では2003年度収支決算案、2004年度の収支予算案が可決されました。昨年10月22日に举行された学園120年記念行事や、総会直前の6月上旬に「同窓会ホームページ」が新しく開かれたこと(別掲)などが報告されました。また、実際は2004年度予算で執行されることになるのですが、4月に母校が週刊朝日の企画「名門100校」に参画しましたが、この費用の一部を同窓会が補助することになり、その旨報告後、了承されました。また、総会の初めに新たに判明した物故者氏名が報告されましたが、最近、若い会員の死亡が増えているのが気がかりです。会員諸兄に置かれましても、健康に留意して過ごされますようお願い申し上げます。

総会に引き続いて椿山荘にて懇親会が盛大に開かれました。会員70余名、理事長、ドイツ文化センター語学部長など来賓の方々、旧教職員など総計130名の出席者でした。宮田会長の挨拶に続き、水上忠理事長、永井伸一校長から祝辞があり、会は賑やかに始まりました。バックには1945(昭和20)年卒、無量田蔵六氏のバンドによるウィーン音楽が流れて、獨協同窓会らしい懇親会となりました。出席同窓会員も老・壮・青の諸兄及び今年の卒業生が世代を越えた話に花を咲かせていました。今年は例年と異なり会場が椿山荘一階の芝生の庭を前にした広い部屋となり、受付も会場前に設定できましたので、混雑もなく受付を済ませていただけました。

2005年は、6月18日(土)に総会及び総会終了後、椿山荘で懇親会を開催します。多数の会員の出席をお待ちしております。

---

## 名簿発行のご案内(今年度会費納入で新名簿送付)

同窓会では2005年5月、2005年度版の名簿を発行します。前回は2000年の発行で5年毎の発行です。

同窓会では今年度(2004(平成16)年度)の年会費(5000円)を納入して頂いた会員諸兄に、この新名簿を無料で送付いたします。ぜひ、今年度の会費をご納入ください。

なお、5年前に比較すると、PCの普及やインターネットの充実で、名簿についての会員の関心が少々変わってきているように感じます。5年毎の名

簿発行も転換期を迎えているのか今後幹事会で議論していかなければならないと、考えています。

＜昭和20-4年卒の方へお詫び＞

獨協通信62号に、昭和20-4年卒の方の年度会費振込用紙が同封されませんでした。本年度の会費免除者は昭和20-5年卒以前の卒業生が対象になります。63号に年度会費振込用紙を同封しますので、恐縮ですが、お振込みいただきたくお願い申し上げます。当方のミスをお詫び申しあげますと共に、同窓会活動にご理解、ご協力を御願いたします。

---

## 獨協中学・高等学校同窓会ホームページ公開

<http://www.dokkyo-mejiro.com/>

2004年6月18日にかねてから要望がありました獨協同窓会のホームページが開設されました。獨協中学・高等学校のホームページ内からリンクが張られていますので、同窓会のURLが不明でも容易に閲覧が可能です。是非一度ご覧下さい。お知らせ(会報、定期総会、事務局から)、同窓会について(同窓会とは、会長あいさつ)、アラカルト(目で見える獨協百年、歴代校長、最近の目白探訪)

など盛りだくさんの内容になっています。会報には最新号が掲載されています。また、アラカルトには獨協の歴史がビジュアルにわかるシリーズを連載中です。なお、ホームページの作成に当っては昭和49年卒木山晋哉さん、昭和53年卒鈴木成之さんがご尽力されました。ここにお礼を申し上げます。また、ホームページ上に掲載ご希望の内容、記事がありましたら事務局へご一報ください。

## 私の近況

○今年、丁度90歳になりました。クラスメートは何人生存されているでしょうか。

**木藤 了志** (昭6卒)

○満90歳を目前に毎朝散歩をし妻84歳と2人暮しです。級友萩原巖君の物故を知り追悼します。

**田中 正名** (昭7卒)

○昭和61年より、昨年1名、今年1名の会員の死去に伴い、年2回湯河原で開催の同窓会を取り止めました。会報の発行は続けます。

**小島 光彌** (昭10卒)

○老齢のため、昨年末弁護士登録を取消しました。現在は無職です。勿論、事務所は閉鎖しました。

**山本 茂** (昭12卒)

○小生が入学した昭和8年は丁度創立50周年の年でしたが、母校は衰微の極 "あゝ九百の健男子" は468名で半分にも満たなかった。友人も僅かになりましたが細々と同窓会をしています。

**斎藤 資郎** (昭13卒)

○獨協中時代は5年間音楽部に所属、趣味のバイオリンを携えアマチュアオーケストラに参加、目下定期コンサートを控え猛練習の毎日です。

**小澤 武彦** (昭14卒)

○旧姓・池田。昭和21年結婚して月江となる。栃木県の黒磯市長を4期16年つとめ、現在は自分が設立した幼稚園の理事長をつとめている。

**月江 富治郎** (昭15卒)

○今春社長を辞任、会長に就任いたしました。元気に頑張っております。

**倉谷 三男四郎** (昭16卒)

○剣道部OB会に戸隠会なる集まりがあるとのこと、小生もオイボレながら未だ傘寿の剣をにぎって居りますのでなつかしく思っています。

**宮田 仁** (昭17卒)

○今年満80歳になります。お陰様で健康で小学校の社会人講師(将棋・囲碁部)をしております。

**山口 勝** (昭17卒)

○80歳に近くなりました。地域医療に従事しています。

**蛭原 誠有** (昭18卒)

○平成15年5月にて内科医院を閉院し、6月より家内と一緒に老人ホームに転居しました。

**原 元一** (昭18卒)

○自分の能力を必要とする社会的需要がある限り、幸い健康です。現役です。

**木村 久衛** (昭18卒)

○同級生がどんどん少なくなる中で後1年余で80歳にも成りますが、まだ現役で患者を診ておられる事は大変幸福と存じます。皆々様の長寿を祈っております。

**蒲 滋** (昭18卒)

○現役をリタイヤして息子のクリニックを顧問として手伝っています。

**斎藤 重夫** (昭19卒)

○昔の獨協、今の獨協、その心はどう変わったのでしょうか？

**市原 朔雄** (昭19卒)

○体不調故、歯科医を廃業しました。

**斎藤 俊文** (昭19卒)

○続弓道部のこと・大森ドイツ学園との親善試合を新宿外山町東京陸軍第一病院傷病兵慰問試合でした。前者は砂糖たっぷりの

紅茶とケーキ、後者は山盛りのお菓子が目当てで勝敗よりまさに敵は本能寺にありでした。

**塩崎 國夫** (昭19卒)

○専門分野の原稿書きやボランティアで近くの緑地の保全活動などをやっています。

**光楽 昭雄** (昭19卒)

○お陰様で大過なく過しております。昭和19年3月卒業の獨逸語組の集まりがありましたら出席したいと存じます。

**根本 泰宏** (昭19卒)

○第62号通信にて台湾の同窓生記事感激致しました。現在、自適の生活ですが現役時代、台湾には数年在留しましたので特に陳以文氏は同窓生であったわけで懐しく思いました。

**片倉 正博** (昭20卒)

○日々、楽しみ三昧の生活。ドイツ語、中国体操、ダンスに加え、多摩六都科学館(在西東京市)のボランティアを始める。体力が衰え、夜の会合が苦痛となる。

**黒沼 昭夫** (昭20卒)

○数年前重症肺炎とやらで家族を大変心配させたので現在なお医師の指示で生活改善中です。

**濱田 望** (昭20卒)

○75歳になりますが地域医療のホームドクターとして活動しております。昔日が懐しく思います。

**宮崎 昭** (昭20卒)

○住居の近くに獨協埼玉高校があり、制服共々、なつかしく思っております。元気に過ごしております。母校の益々の発展をお祈り致します。

**山賀 七郎** (昭20卒)

○二宮尊徳の思想哲学仕法(一円融合)を現代社会にどういかにすかの講習会、勉強会等をやっています。編著書「二宮尊徳のすべて」新人物往来社発行

**長澤 源夫** (昭20卒)

○イラン、ヨルダン、シリア、レバノン、東トルコなどの遺跡を徘徊しています。

**本田 光芳** (昭25卒)

○小生新しい校舎を見ておりませんので、機会をみて見学に伺いたいと思っております。

**鈴木 三郎** (昭25卒)

○平成15年末、退職。

**青木 泰雄** (昭25卒)

○今年3月に沼津高専を退職し、49年間の教員生活に幕をおろしました。現在は、専門の論語・漢詩の研究を続けてゆくつもりです。

**棚木 光雄** (昭26卒)

○酒井君、深津君が亡くなり残念です。私は、まだ現役です。

**太田 孝一郎** (昭27卒)

○卒業後49年、来年は50年目になります。今でも現役で仕事をしていますが、同期の皆々様お元気でしょうか？ 50年を機会に一度お逢いしたいものです。年をとると昔を思い出すと言いますが、その通りですね。

**丸山 幸三郎** (昭30卒)

○ISO9000の審査員(JQA)、講師(グローバルテクノ)、コンサルタントをやっています。

**赤瀬 暁** (昭31卒)

○定年退職し、今は医院の当直です。

**羽里 幸彦** (昭31卒)

○昭和28年、佐藤明徳さんの卒業写真と天野貞祐先生ごばれ話

はすばらしかった。あの建物は今も私の記憶の中になつかしく存在します。天野先生の人に対する心づかいに自らを反省しました。

**青野 和雄** (昭32卒)

○高校・英語科の昭和32年卒です。クラス会開催の準備会を行いますので有志の方の連絡をお待ちします。(連絡先) 044 (988) 5769 (FAX兼用)

**小川 秀明** (昭32卒)

○医科系OBのみの獨協通信となって居り、その他業種でも活躍されている同窓生の情報等も掲載しないと懐かしい母校である獨協生たる事を残念ながら忘れます (ヒガミではないが！)

**山寺 央也** (昭33卒)

○訪問介護サービスの事業の指定を受け丸3年経過。介護保険制度が浸透し、利用者が増加中です。

**花岡 紀夫** (昭35卒)

○母の介護の日々を送っております。

**渡部 亨** (昭35卒)

○定年、引退、第2の人生へスタートの年齢になりました。

**樋田 修広** (昭35卒)

○明治大学ボクシング部監督に成って10年目に入りました。成果は？お茶の水の近くに来たら寄って下さい10号館B1、PM4～6時、練習見えます。

**鈴木 義三郎** (昭35卒)

○リタイアして2年、毎日が日曜日の生活に慣れて来たのがこわい！同級の藤田、長久両君との交流も早44年、会っては食事と、獨協の友情は続いています。

**歌川 信也** (昭35卒)

○本年3月末をもって退職致したので、勤務先に抹消方、お願い致します。

**松本 益道** (昭36卒)

○ハッピーリタイアメント1年生、適度に所用、雑用あり満足感を味わっています。マイペースで健康維持、向上心を持ちつつ、最適な日常生活を模索構築中！

**渡部 皓一** (昭36卒)

○関西に来てもう20年になります。現在は妻(園長)と3つの保育園の事務長として経営に携わっております。今は書道に親しんでおりますが、なかなか上達しません。今年こそもう少し上達したいと思っています。

**宇都見 忠** (昭37卒)

○初めてのCDをフランスのアニー・ダランクールと共に「UNIVERSAL VOICE」を出します。

**松本 匡史** (昭37卒)

○7月25日、軽井沢タリアセンでインターアクティブNPOを行います(私が理事長)子供たちが自然の中で遊び考え、物作りに励む中で、自分の進むべき夢、道が見えてくるのではないだろうか。小2～小6の子供。

**菊竹 清文** (昭38卒)

○昨年の同期会知らずに残念でした、今年も開くようでしたら合田さん連絡下さい。

**安田 種光** (昭38卒)

○つくばね薬局から今年3月に練馬のミズ薬局に転勤になりました。宜しくお願いします。

**花輪 良一** (昭39卒)

○病院長をしています。地域医療支援病院(県内唯一)救命救急センター、茨城県地域がんセンター、臨床研修病院として高単価を維持しています。

**石川 詔雄** (昭39卒)

○娘二人医学部生。次女が獨協医大2年生です。妻と二人暮

しになって、今、猫と犬の世話、バイクツーリング、コーラスそして仕事と、元気に頑張ってます。

**斎藤 直人** (昭41卒)

○卒後、約40年になろうとしていますが、いまだに天野校長の朝礼での「真の自由とは」を忘れる事はありません。そして「国民実践要領」は人生のバイブルであり宝物です。昭和28年初版。

**磯谷 良仁** (昭41卒)

○都立高校にて、故デカ栗先生のマネをして数学を教えています。

**石田 典昭** (昭41卒)

○懐かしく、読ませて頂いております。

**大越 克巳** (昭43卒)

○昭和40年、中学3年3組の仲間とは、色々と親交がありたまにクラス会を行います。

**姚 明雄** (昭43卒)

○中1の娘と再び英語を勉強しています。娘は小5の時に英検3級に合格し、私は大昔に2級をとったままでしたので、あおられています。

**佐々井 俊一** (昭44卒)

○娘が獨協埼玉中学に入学。なつかしい獨協のマークであった。広い意味で私の後輩と話をしたら、変な顔をされてしまった…。

**渡辺 寧** (昭46卒)

○2回目のドイツ駐在(通算9年半)から帰国して早や2年が経過しました。元気でやっています。

**木田 宏海** (昭46卒)

○医薬品メーカーに勤務して30年、獨協高校卒業のドクターに協力してもらっています。獨協高校卒業のドクターが多いのは驚くほどです。

**高橋 一裕** (昭46卒)

○獨協を卒業以来、夢に見たドイツでの会社設立が、ようやく出来ます。ベルリンはポツダム広場のソニーセンター内に、独自資本の会社を設立します。

**何合 泰源** (昭46卒)

○日本橋小伝馬町で法律事務所を開業して15年になります。最近、日本橋も話題の場所がいろいろありますので、遊びにいらして下さい。

**戸崎 透** (昭47卒)

○北杜夫著「楡家の人びと」を愛読する余り、登場人物の实在人物との対比を研究しています。その結果斎藤茂吉も獨逸協会別科でドイツ語を学んでいたこと「楡家」の欧州＝斉藤西洋氏が、大正8年獨協中学を卒業していたことを知った暁は、獨協で学んだことを嬉しく思いました。

**大島 康成** (昭48卒)

○製薬企業から薬科大学の教員に転身した。新設学部の中で自分に何が出来るか格闘中です。

**秋元 雅之** (昭48卒)

○長男が今年獨協大学外国語学部に入學し、また獨協学園にお世話になります。

**小林 譲治** (昭49卒)

○結婚する予定があります。友人などに出席してもらいたく思っています。

**立川 暢英** (昭49卒)

○「宅建試験」の通信教育、教材制作を20年続けています。

**桧山 公一** (昭49卒)

○今年度から心臓ドックをはじめました、心臓に不安がある方はどうぞ。現在、心臓血管研究所で循環器科部長をしています。



ます。  
○3月末に、木村重利先生を囲んで目白・揚子江にて同窓会を開き、計16人ものメンバーが集まり、大変楽しい一日をすごしました。

**永島 和幸** (昭51卒)

**寺田 壮治** (昭51卒)  
○4月の9日に第2子(長男)が誕生しました。昨年7月に田村(孝雄)先生クラスの同窓会があり、旧友に元気をもらいました。

**久志本 明人** (昭52卒)

○昨年、保険代理店を法人化して人を増やし保険のプロとして頑張っています。契約が増えるに従い、社会的責任の重さを実感する毎日です。

**鳥居 誠** (昭54卒)

○本年2月に弘前大学医学部救急・災害医学講座の教授に就任しました。弘前にお越しの時には声をかけて下さい。

**浅利 靖** (昭54卒)

○二冊目の本を書きました。「実録！東京都議会議員パート2 破綻寸前 東京の"道路公団"～道州国家の参議院改革論～」(発行：日刊ゲンダイ／発売：出版研 ￥1600) 最寄りの書店で注文して下さい。

**田中 良** (昭54卒)

○15年間勤務した日大病院を本年1月退職し、父と共に医院をやっております。

**上原 毅** (昭56卒)

○昨年、都内に引越してから都心に行く機会が増えました。先日車で出掛けた折にたまたま目白の校舎の前を通ったのですが、懐かしくて思わず江戸川公園などを子供と散歩してしまいました。

**高橋 一則** (昭58卒)

○動物病院を開業しています。職種にあたるものがなく困ってしまいました。

**武井 俊夫** (昭61卒)

○獨協通信を楽しみにしています。

**岡本 浩一** (昭61卒)

○東京三菱銀行の都内支社で法人取引の仕事をしています。昭和62年当時の旧校舎が懐かしいです。母校の更なる発展を願っています。

**藤本 武司** (昭62卒)

○ロスにMBA勉強のため留学中です。

**村田 真人** (平2卒)

○平成15年11月に開業しました。今年3月に3人目の子供が産まれました。益々、頑張らないと。

**神崎 貴紀** (平2卒)

○先日、千葉三越での陶芸展を行いました。今年の夏には地元市川市の海辺で縄文土器を焼成する祭り「市川シーサイドフェスティバル」のリーダーとしてはりきる予定です。

**平 厚志** (平4卒)

○医療関係メーカーの営業マンとして、輝く命が守られるよう日々精進していきたいと思います。

**沖 有介** (平6卒)

○4月の人事異動で総務課に移動しました。ボランティア保険や自治功労などが担当です。間接的に同窓の方のお名前にふれているかもしれませんね。

**藤島 一郎** (平7卒)

○小児科志望です。

**小暮 裕之** (平9卒)

○私事で飯田橋駅を利用した際、当時の良き思い出が浮かんできた。いつの間にか獨協生を探している自分、照れくささを感じながら。

**半田 昌雄** (平10卒)

○大学院博士課程へ進学し、日々研究の生活をしています。今年はドイツ、スイスへ行けそうです。

**五味川 健治** (平10卒)

○現在、Gaiaxというベンチャー企業にてinternship中！ひたすら"今"を生きるのに精一杯の今日この頃です。

**鄭 超元** (平11卒)

○4月より東京工業大学大学院に入学しました。

**小林 裕卓** (平12卒)

○しばらく帰国していませんが、元気で過しているようです。

**渡来 智司** (平13卒)

○とにかく頑張ってます。

**松浪 敢** (平16卒)

○来年の受験にむけて勉強中。

**山口 愛司** (平16卒)

## クラス会だより

### 昭和17年卒 山紫会 英獨合同懇親会

山紫会の懇親会は世話役が交替したこともあり、獨協からもさして遠くない神楽坂にあるうなぎ割烹の老舗「志満金」に於いて6月7日に開催した。

この会のメンバーも今年は殆どが80歳を迎え高齢化は覆うべくもなく、年々欠ける方々もあって淋しいかぎりではあるが、当日は20名の旧友が集い往時を偲び悪ガキの頃の話などにも花がさいて、一同楽しい午後の一時を過ごすことが出来た。

尚、秋には有志での小旅行も計画している。

(世話役・滝川 昇、酒井 一男、吉田 穰)



### 昭和18年卒英語科 獨協一八会

平成16年6月5日(土) 恒例の獨協一八会クラ

## クラス会だより

ス会を「アルカディア市ヶ谷」で開催し、今回18名の参加、卒業以来61年、出席者が少なくなってゆくのが気掛りです。それでも毎年、高岡市の万葉歴史博物館の名誉館長に就任された恩師大久間喜一郎先生の出席を頂き、お元気なご挨拶と近況報告に一同益々のご繁栄を祈り申し上げました。躰不調の便りの多いなか出席者の出会い、会は大いに盛り上がり田中幹事の同窓会・母校の近況報告等々、楽しく時の過ぎるのも忘れしました。

最後に獨協通信第62号で、雪山常任幹事の「60年経て懐かしの母校・級友 台湾の同窓生を訪ねて」では、クラスメート劉祐上君の元気な姿を見て在学中の思出など語り合いました。雪山幹事にはご慰労申し上げ厚くお礼申し上げます。会の今後の発展と皆の健勝を祈り、平成17年6月4日(土)の再会を約し散会した。(友田 文夫・記)



### 昭和20年(4年)卒 1組クラス会

昭和20年4年1組卒業生は年に2回クラス会を行っていますが、その中1回は泊りがけで温泉に出かけております。平成16年5月7日には新緑の美しい箱根湯本温泉「湯本富士屋ホテル」で春季懇親旅行会を開催しました。

当日は8名が参加しましたが、何れも喜寿真近



とは思えない元気者揃いで、思い出話に花が咲き楽しい宴会となりました。(桂 義之・記)

### 昭和20年卒ドイツ語科 クラス会

まだ暑さの残る9月12日、銀座三笠会館で卒後59周年のクラス会を開きました。出席者は33名で、その内2名は奥さん同伴でした。卒業して既に半世紀以上を経た我々のクラスは、多くのクラスメイトが体調を崩して病床に伏せ、また歩行器にたよるものが多くなったことは、年齢のこととはいえ残念でなりません。

来年は卒後60周年になります。来年の幹事は黒沼昭夫君、畦森公望君が引きうけてくれました。

来年には、またみな元気で集まることを約して約3時間半に及ぶクラス会を終りました。

(神山 一郎・記)



### 昭和31年卒 ドイツ語クラス会

31年卒ドイツ語クラスのクラス会を7月17日、MA, MAISON 池袋店にて開催いたしました。

ゲオルゲ全詩集に続いてこの度新訳リルケ詩集を出版されたばかりでご多忙の富岡近雄先生にも



## クラス会だより

ご出席いただきました。クラス会として集まったのは久しぶりだったので獨協での天野先生の授業の事や懐かしい話で大いに盛り上がりました。富岡先生の偉業に感激し、次回も元気に再会出来る事を願い散会した。(日比谷 平三郎・記)

### 昭和41年卒 獨協一月会

平成16年1月17日(土)、銀座・有邑RAKUZAにて開催。

昨年は熱海温泉にて1泊旅行でしたが、今回は東京での開催となりました。参加者は8名でちょっと寂しい会でした。それでも、年に1度しか会えない人もいて旧交を温めることも出来ました。主管の神田先生もお見えになって全員の出席をとり、楽しい一時を過ごして頂けたかと思います。先生のクラス会は盛んな学年とそうでない学年があるようで、もっと活発になってほしいものです。

今年は雪模様の天気でしたので1次会で、早々に散会をしました。来年は宿泊組みと東京組みで意見が分かれたので、幹事に一任ということで1月15日(土)となりました。(中村 昭美・記)



### 昭和49年卒 3年4組クラス会

平成16年8月28日、新宿「宮川」にて2年振りとなるクラス会を開催いたしました。今回のクラス会は昭和49年に卒業して30周年記念のクラス会となりました。また、今回も獨協埼玉高校の校長先生になられた我らの主管石井征次先生をお招きして、17名が集まり先生の還暦と30周年のお祝い会となりました。参加者の近況報告のあと、各々30年前の青春時代にタイムスリップして、先生を困らせた数々の事件・騒動の話など今となっては

大変懐かしい獨協高校時代の話に花が咲き、その場で二次会に入りあつという間に5時間を過ぎ、笑っぱなしの一夜を過ごしました。幹事の丸山君より、次回も盛会にすることを約束し散会となりました。(清水 規夫・記)



### 東京都庁同窓会

平成16年10月4日、新宿ワシントンホテルにて東京都庁、教育庁、警視庁に勤務する職員及び都議会議員として活躍中の卒業生が集まり同窓会を開催した。

本会は東京都に関わる仕事に従事する同窓生の集まりで、他に例の少ない職場単位の同窓会です。当日は、都議会議員の田中良氏、高嶋なおき氏、土屋敬之氏を発起人として総勢16名が集まり、宮田和夫同窓会長、永井伸一校長、田代雄一先生、金有一先生をはじめとして同窓会や教員の方も参加して賑やかな会となりました。



現在都庁に勤務する同窓生は33名おりますが、同窓生の多数の参加を期待しています。

(昭和49年卒 柳沢 潔・記)